島尾敏雄全集 第7巻

一九八一年三月二五日発行

著者 島尾敏雄
発行者 株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)
振替東京六-六二七九九
堀内印刷・美行製本
© 1981 Toshio Shimao
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島尾敏雄全集

第7巻

島尾敏雄全集第7巻・目次

われ深きふちより　7
狂者のまなび　28
或る精神病者　48
重い肩車　75
治療　96
のがれ行くこころ　113
転送　137
ねむりなき睡眠　165
一時期　188

*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

葉篇小説集

街なかは荒野！ 208
影 211
夢にて 215
体験 219
三つの記憶 224
松田君の場合 230
笛の音 233
草珊瑚 238
硝子障子のシルエット 242
鶏飼い 248
終電車 251
鶏の死 256
妻の職業 261
きみよちゃんの事 266

金魚 271
子供 276
突つき順 281
おちび 286
ニャンコ 291
居坐り猫 296
マヤ 301
玉の死 306
ある猫の死のあとさき 311
つゆのはれ間 316
二軒の古本屋 321
運動会 326
拾った猫 331
地蔵のぬくみ 334
兄といもうと 337
遠足 340

ブックデザイン　平野甲賀

われ深きふちより

私たちがまだ外来で神経科の診療室に通っていた時分、私は神経科の病棟から精神科の病棟を遠巻きにして眺めながら、暗い気持に陥ち込んで行くのを防ぐことができなかった。

私の心もからだも妻の神経症にうちひしがれていた。その反応の発作の時の論理は強靱で、その論理に従う限り、妻も私も生きていることはできなかった。追いつめられると私は醜く逆上して何度も紐を取って自分の首をしめにかかった。すると妻は南島の伝説にある水陸両棲の動物の「けんもん」のように膂力が強くなって私の力を奪い私の首から紐を外した。ふっと襲いかかる魔の瞬間を外すと私には生への執着がどっとやって来た。そのあとには妻の方に危険な自殺の誘惑がやって来て私の神経はくたくたに疲れた。

私と妻とはその頃半年もの間殆ど、お互いが片時もそばを離れることができなかった。そのために勤めていた教師の職は放棄し、物を書く余裕もないので生活は眼に見えて逼迫した。

私には既に世間というものがなくなってしまった。ただ、妻の神経の表面にメタン瓦斯のように限

りなくわき上って来る疑惑のいらだちに、寝ても覚めてもいや真夜中でさえもお互いが顔をまともにつき合わせて、その日その日が移り変った。

治療のききめは殆ど認められない程なのだ。既に性格の一部になってしまったのではないか。私にも妻にも、そして子供たちにもそのいくらかは、未来というものの貌が考えられなくなった。

長い間私たちは神経科の診療室に通った。その途中の電車やバスの中で、私たちは幾度醜い言い争いをしたことだろう。人混みのプラットフォームで突然私は妻の平手打ちを受け、私はかっとなり又妻に平手打ちの仕返しをしたことがあった。妻が一層物狂おしくなると私は方途を失い、逆に電車の中を大声で妻の名前を呼んで歩き廻った。私は妙に執拗になり運転台近くにいる妻をその反対の端の方から、名前を呼んでいつまでも手招きしていると、妻は仕方なしに子供の作り笑いのような顔付になった。(そのゆがめた口の端の印象が妙にいつまでも心につきささった) 妻がそばにやって来れば、私は又その反対の方によろよろ歩いて行った。車内の人はみんな私たちを見た。近県から都心に出て来る野菜売りの百姓の女房たちが、袖をつつき合いみだらな笑いを浮べているのが眼に残った。私はもう前方が見えなくなってしまったように思った。

しかしとにかく私たちは効果のはっきりしない治療を続けてしてもらう外に方法とてなかった。憑き物が落ちるように正気に戻ってくれないだろうか、などと私は道端の石くれにさえ祈りかねなかった。先頃の戦争の時特攻兵だった私が、突如として沖縄島が海中深く陥没することを願ったように。

神経科での妻の長い治療を待つ間、私は蟻地獄の巣のすり鉢の斜面を歩き廻っているような、救われようのない淀んだ憂鬱な状態で時間を消していた。一方では成るべく治療の時間が長引いた方がい

いと思ったりしながら。とにかくその間だけは妻が信頼している医師の手中に妻をゆだねていることができたのだから。しかしやがて又帰途のびくびくした道中が続き、次の治療日までの堪えがたい希望のない状態が、なだれ襲って来る暗雲のように背後に覆いかぶさっていた。

小さなコンクリートの用水池のふちにしゃがんでじっとにごった水の面を無意味に見つめていたり、苜蓿の四枚葉を探してみたりしても、刻々がいつもぷつぷつ断ち切れていた。診療室の暗幕のかげでベッドに横たわり、眉根を寄せて絶え入るような、ききようではうっとりしているような訴え声で、めんめんと自由連想を言葉にしている、異常な宙空に浮上った妻の世界のことを考えると、可哀想で仕方なくなり、自分は汚辱にまみれても、彼女の憑き物のしもとを黙って受けなければならないと思った。

私の眼の前には精神科の棟の低い女病棟が風雨にさらされて黒ずんで横たわっていた。

扉はすべて固くとざされ、窓にはこまかく木の格子や金網が張ってあったり又鉄格子がはめてあった。内部はうす暗く、或いはうす暗い水族館の室内で水槽の中の奇体な熱帯魚を見るような具合に、格子の向うに患者たちの顔が集ったり離れたりふわふわしてうかがえた。

時として病棟の中を怪鳥のような高笑いが吹き抜けて行くことがあった。

すると私は多分病棟の中の廊下を髪もおどろの気違い女が哄笑して走って歩くだろう姿を眼の底に思い浮べたのだ。

それは如何にも人生の悲惨事、というふうにも思えた。恐らくは精神病は治癒の見込みはないであろうというふうに思われた。精神病を治療するということはどういうことなのか。それは暗い重苦し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

い思いなのであった。
精神病棟の中に収容されているであろう沢山の患者の女たちが、そこに入れられるまでの未だ普通の生活をすることができた日々のおだやかな日常の姿態などを、私と妻の過去の日々のそしてこのようになってしまった成行の細部とで補ってみると、どっとばかり胸がしめつけられて来るのであった。もう過ぎてしまった日の平穏な何気なさは取り戻すことができない。過ぎてしまった日々は再び戻っては来ない。頭がそのことだけに囚われると、視野の隅から墨汁を流し込んだような暗さが、重く圧しつけて来る。
世間の何気ない多くの営み。それがどれもこれも、恐ろしく深い、そして抜け出ることのできない淵に臨んでいるように思えて来て、私はいたたまれぬ思いにさいなまれた。
「ほらほら、西病棟のおつるさんが笑い出したわよ。あしたは雨かな」
看護婦たちの言葉が私の耳にはいって来た。こんな冗談の言葉がまだあったのだと私は思った。看護婦たちに深淵は気付かれてはいまい。私たちにそのような日が帰って来るか。私は益々孤独に追いやられた。私は泣き出しそうな顔付になっていることを知った。しかし泣き出さずに止まっているより方法もない。
どうしてか病棟の向う側に廻って見たかったのだ。向う側がどのような作りになっているかは分らなかった。
「無用の方は近付かないでください」
と書いてある立札が妙に魔力を持っていた。その制止の文句、それを書いた人たちの姿勢に、とい

うよりも私は精神病者たちとの隔絶の感じに独り相撲をしていたのかも分らない。
それだけ一層そっちの方に何か大切な鍵が置かれてあるようにも思えた。向う側のその方に精神病者の病棟の内部が、あからさまに口をあけているように思えた。
思いきって私はそちらの方へ近付いて行った。
近付くと窓の下には冷え冷えとした空気があるように思えた。窓の内部はうす暗くて何も見えなかった。物置のような感じがした。その暗い中にうごめく物を見るのは躊躇された。窓の下のあたりにはせと物や刃物のかけら、かみそりの刃などが落ちていて、思わず足のうらを切り込みそうな感じがした。見廻したところそのようなものは見当らなかったけれど。私はつま先立てて歩いて、そろそろと向う側に廻って行った。誰かにとがめだてされそうに感じながら。
向う側には又別の病棟が建っていた。その向う側にも又別の病棟が建っているようであった。それは迷路の中の建物のように、私には隠されているように思えた。
高い所に窓がついていた。そこはみんな鉄の格子がはまっていた。つと青白い顔が動いた。
私は眼を伏せ、そちらを見ないようにした。そしてこちら側の、今廻って来て見ようとしている病棟を、いきをこらして見た。
いくつもの部屋に、一つずつ窓がついていた。とっつきの部屋には誰もいないようであった。
おや！　この病棟は既に廃棄されてしまったのではないか。ふと私は不吉にそう思った。
そして次の部屋の窓に眼を移して私は思わず立ち止ったのだ。
若い女が格子に両手をからませて私を見ていた。私の来るのをずっと前から待ちあぐんでいたよう

にも思えた程に、その女は私の視線をつかまえた。
そして声をたてずに、かすかに笑いかけようとした。
(私は電車の中で無理に笑い顔をつくって車中の人々に私の醜態をつくろってみせた妻の声のない笑いを思った。いつまでもそのぎこちない笑い顔だけが抽象されて、可哀想に可哀想にという気分に私を誘い込んだ)
思わず私は歩を返した。
顔は恐らく、却ってこわばった。
そしてどんどんもとの神経科の病棟の方に帰って来た。
私はぐったり疲れた。どうすればよかったのだろう。もう少しどうにかやわらかな様子をその患者に示すことができなかったものだろうか。
素直な束ね髪と明るい柄の着物と、まだ若いその女の感じで、私は結婚したての、都会から離れたいなかの古い家につれて来られた若妻ではないだろうかなどと妄想した。
眼がたよりなげに疲れているのが、妻のあの視覚ばかり鋭敏になって発達してしまった皮膚のうすい熱っぽい、自らを統御できなくなった困惑に満ちたまぶたに一種の幼さをただよわせた眼を、思い出させた。
窓の格子につかまって、その若い女は何を考えていたものか。そしてその女にどんな将来が訪れて来るものか。
私は又どうして病棟の向う側を見になど廻って行ったのか。私は手を振って、その印象を払いのけ

ようとした。
私の今は、むしろ自分であらゆる周囲から隔絶していないと苦しくてたまらないと思い込んだりすることが多かったのだ。しかしそれは妻の中に巣食ってしまったもう一人の別の妻のおさえられない発作に対しての、向けようのない抑圧してねじ曲げた抗議の別の姿であったのかも分らないのだが。
しかし、やがて私たちは、入院しなければならないことになった。しかも色々な都合で神経科の開放病棟の方にではなく、閉ざされた精神病棟の方にはいることになったのであった。
私はも早、病棟の外から遠巻きにするのではなしに、その内部にはいり込み、格子に手をつかまらせて、窓の外の世界を眺める側に廻ったのだ。ただ私も一緒にはいるために、あの女だけの病棟は具合が悪く、男の病棟に廻されたのだけれども。
ちらと垣間見た向う側のその奥の方には、私が見たよりもっと多くの病棟が建てられていて、医師や看護婦や使丁たちが、扉の錠前をあけるための鍵を腰のへんでがちゃつかせながら歩いていたのだ。
住んでしまえば別にそこで秘儀がふんだんに行なわれていたわけでもない。患者たちへの私の手さぐりの追求、横たわっていると思った断絶の淵、発作の時の叫び声、言葉の通じなさ、窮屈で固着した執心、亢奮と誇張、唐突さ。要するに精神病棟に入れられた私たちに、わあっとばかり取巻いて来た何か濃密な弾力性のある、新鮮なおどろきを伴った気体は、時がたつにつれて次第に稀薄になってしまったのも当然かも知れない。
はじめの間、私は彼らと同じ患者仲間と目された。尤も男の病棟に、女の患者がまさかはいって来たのだとは思えないだろうから。

私はむしろ、病棟の外の世間での気疲れがなくなったばかりでなく、入口の扉におろされた錠前のために、執拗に襲いかかって来る外部からの諸々の悪意が遮断されてしまったと思った。妻の神経に巣食っている憑き物さえ追い出してしまえば、当分は妻と二人きりでこの病棟の中でくらしてみてもいいと思った。

既に私は、大っぴらにわめきたい時にわめきちらし、妻と廊下の追いかけっこをし、一晩中ぶつぶついさかいをし、又突如として妻の発作が（いやいつのまにか私もいささか発作的になっていたのだが）解消するとすぐ、肩を組んで廊下を歩き、お尻を支えて便所通いをし、凡そ世間の妻のすることは総て私がやり、妻は私を呼び捨てて鷹揚に振舞い、私は嘻々としてこまめに奉仕することができた。

それは世間では或いはおかしなことであっても、ここではそのために拘束される何ものもない。いやそれは誇張かも分らない。次第に患者たちの癖に馴れてくると、彼らの言葉が分るようになり、叫声におどろかなくなり、亢奮もおそろしくなくなって来ると、ここにも矢張り扉の外の世間がもぐり込んで来ていないことはなかったけれど、亢奮がおさまっている時に彼らがいくら世間並の顔付をしていても、抗し難く襲ってくる自分の発作が、他人の発作を認めることになっているようであった。いくら馴れてしまっても、やはりここでは、他人の発作に寛容であり、私はむしろ傷つけられること少なく、誇高く生活されそうに思えた。

そこにはどんなに色々な症状の患者たちがいたことだろう。いやそれとても、世間と同じに色々なくせのある性格の人間の寄り集りと変りはなかったかも分らないが、たとえばどんな性格の人であっても、きまって或る時にがくっと尻込みしてみせる一種のもろさを持っている。各自の発作に対する

尻込みが私を安心させてくれたのだ。からだの一部に治癒しにくい傷痕を持った図体の大きな昆虫、といった感じを私は彼らに抱くことができた。それには世間での生活に自信を持った医師や看護婦や付添たちの振りまいて歩く器用な身ごなしには見つけることのできない、グロテスクな何かがあった。しかし私はその不自由なぎこちなさに、安堵している自分の心をかくすことができない。ぶきっちょな手足で、背中の自分の傷をいじることのできない可哀想な虫。そしてその傷をいつも気にしてひけ目に思っている哀れな善人たち。しかしみんな世間では役に立ちそうもない人たち。

深夜病棟の廊下を歩くと、私は言いようのない亢ぶりに襲われるのであった。

いくらか症状の重い患者たちは、同じ病棟の中で更に一方に集められて錠前をかけられていた。私はまだしも長廊下だけはいつでも自由に歩ける部屋にはいっていたから、そのように幾重にも錠前のかかった建物の中で、他人の手にゆだねて眠っている魂たちの（勿論幻覚や不眠に襲われている者も少なくはないが）身の上のことを考えると、悲しい気持に沈んでしまうのであった。当直の医師や暁番で起きている看護婦たちも、まるで不可抗力に近い巨大な運命の歯車に、どれだけ逆らうことができるのだろうかなどと私は思ったりするのだった。しかも私は妻の発作と闘うだけで、のめってしまっていたではなかったか。

或る晩、私はこんな夢を見た。

夜寝る時刻になって、私たちの部屋の方も更に狭い区画に仕切られた上、扉をしめられ錠前をかけられることになってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.